

【本論文】

高知県日高村に定着した国外外来魚タウナギ

岡村恭平¹・高橋弘明²・野村彩恵³・遠藤広光¹¹ 高知大学理工学部海洋生物学研究室 〒780-8520 高知県高知市曙町二丁目 5-1² 株式会社 相愛 〒780-0002 高知県高知市重倉 266-2³ トンボと自然を考える会 〒787-0019 高知県四万十市具同 8055-5

(2026 年 8 月 26 日受付, 2026 年 9 月 25 日受理, 2026 年 9 月 30 日公開)

Kyohei Okamura*, Hiroaki Takahashi, Sae Nomura, Hiromitsu Endo. 2026. The Asian swamp eel (*Monopterus albus*), an alien fish species established in Hidaka Village, Kochi Prefecture, Japan. NANYOSEIBUTSU, 22: 44–47.

*Corresponding author: Laboratory of Marine Biology, Faculty of Science and Technology, Kochi University, 2-5-1 Akebono-cho, Kochi City, Kochi 780-8520 (e-mail: nnaji.tosa@outlook.jp)

タウナギ目タウナギ科タウナギ属のタウナギ *Monopterus albus* (Zuiew, 1793) は、水田や池沼、小川の泥に穴を掘って生息する細長い底生魚であり、鰭が殆どない、鰓孔がひとつに繋がって腹面に開く、鰓が退化し空気呼吸を主とする、オスが泡巣で卵を保護し孵化仔魚を口内保育する、成長に伴いメスからオスへ性転換するといった特異な形態と生態をもつことで知られる (松本・岩田, 1997; 松本ほか, 1998; 今谷, 2001; 中坊・甲斐, 2013; 波戸岡, 2018; 藤田, 2025)。本種の自然分布域は、朝鮮半島、中国、台湾、東南アジアと広い (今谷, 2001; 中坊・甲斐, 2013; 波戸岡, 2018)。本邦では 1900 年ごろに朝鮮半島から移入された奈良県を皮切りに、東北および関東から九州の各地で不連続に侵入・定着している (松本ほか, 1998; 今谷, 2001; 中坊・甲斐, 2013; 藤田, 2025)。また、琉球列島には遺伝的に特異で九州以北のものと大きく離れることから在来とされる個体群が分布し、繁殖様式も異なるため (Matsumoto et al., 2009; 波戸岡, 2018)、これはリュウキュウタウナギとも称される (藤田, 2025)。

四国において、愛媛県、徳島県、香川県では、

本種は 1970 年代から 1990 年代にかけて侵入し、再生産および分布域の拡大が確認されるに至った (細川, 1987; 安芸・大高, 2005)。対して、高知県では 2018 年に初めて発見され (高知新聞, 2018)、それ以後捕獲が相次いでいる。本報では、本県における外来魚問題の基礎資料とするため、高知県産タウナギを標本に基づいて記録し、生息状況について報告する。

経緯および標本

本報の標本はすべて、高知県高岡郡日高村の仁淀川水系日下川の氾濫原に形成された日下川調整池 [以下、通称のメダカ池という (日下川調整池 (メダカ池))。 https://www.vill.hidaka.kochi.jp/kankou/spot_25_play.html: 2026 年 9 月 16 日参照] から得られた。最初の確認は 2018 年 4 月 21 日であり、著者の一人である野村らがメダカ池内のビオトープを整備中に、掘り返した泥中から全長 29cm, 33cm, および 63 cm のタウナギ 3 個体が捕獲された (高知新聞, 2018)。そのうち 1 個体は冷凍保存の上で後日標本化された (高知大学理工学部海洋生物学研



図 1. タウナギ BSKU 161848 (生時)

研究室魚類標本：BSKU 161824)。その後、2021 年 2 月 2 日に朝岡 隆氏により 1 個体 (BSKU 129456)、同年 5 月 18 日に細木信吾氏により 1 個体が採集された (BSKU 161848：図 1)。さらに、2023 年 3 月 30 日には著者の一人である高橋がメダカ池でタウナギを捕食するアオサギ *Ardea cinerea* を撮影 (図 2)、2026 年 6 月 8 日にメダカ池ビオトープを管理する MST メダカさん家クラブの西本光博氏と武田和志氏により、ビオトープ整備中に 2 個体が (BSKU 160929：図 3・4, 160930)、同年 6 月 21 日には池の外来植物駆除作業中に 1 個体が採集された (BSKU 161825)。

標本

6 個体 (日高村メダカ池産)。BSKU 129456, 全長 131.4mm, 2021 年 2 月 2 日, 朝岡 隆。160929, 全長 157.3mm, 160930, 全長 102.9 mm, 2026 年 6 月 8 日, 西本光博・武田和志。161824, 全長 642.0mm, 2018 年 4 月 21 日, 杉村光俊・野村彩恵ほか。161825, 全長 440.0 mm, 2026 年 6 月 21 日, 西本光博・武田和志。161848, 全長 137.2mm, 2021 年 5 月 18 日, 細木信吾。

これらの標本はすべて、10%ホルマリン溶液で 1 週間程度固定した後、70%エチルアルコール溶液に置換して保存し、高知大学理工学部海洋生物学研究室 (BSKU) に登録した。

結果および考察

本標本は、体表に鱗がなく粘液に被われる、胸鰭と腹鰭がない、背鰭と臀鰭に鰭条がなく鰭褶となっている、左右の鰓孔が合してひとつになり腹面に開孔するという特徴が、中坊・甲斐 (2013) が示したタウナギの標徴とよく一致したため、本種に同定された。本種は高知県の魚類相に関する過去の研究では確認されておらず (蒲原, 1943, 1962; 落合ほか, 1980; 高知県レッドデータブック [動物編] 編集委員会編, 2002)、本報がタウナギの標本に基づく高知県初記録となる。本県ではこれまでのところ、メダカ池以外からの発見例はない。

本種は体長約 25cm 以上で成熟し、34cm 以下ではメス、46cm 以上ではオスであることが知られる (宮地ほか, 1976)。すなわち、同池で 46cm 以上と 25cm 以上 34cm 以下を含む大小さまざまな個体が同時に得られたことは、繁殖可能な雌雄が揃っていることを意味する。また、2018 年の発見から 3 年後の 2021 年、さらには 8 年経った 2026 年現在でも若魚を含む複数の個体が見つかることから、タウナギはメダカ池に定着したと考えるのが妥当である。本種は香川県ではフナ類やドジョウの移植時に混入して持ち込まれたことが示唆されているが (安芸・大高, 2005)、メダカ池ではそれらの放流履歴はなく、侵入経路は不明である。ただし、本種は空気呼吸を行うため、生息する水中の溶存酸素量が低



図 2. アオサギに捕食されるタウナギ (2023 年 3 月 30 日撮影)



図 3. タウナギ BSKU 160929 (生時)



図 4. タウナギ BSKU 160929 (固定直後)

くても問題なく生存可能で、水が干上がったとしても泥に潜って長期間生き延びることができる（松本ほか，1998；今谷，2001）。また，同池には園芸スイレンが生育しており，ハスの植栽も幾度か試みられている。したがって，メダカ池のタウナギは，これらのポット苗に混入して県外から持ち込まれた可能性がある。

本種はその空気呼吸能力により陸上を移動でき落水にも強いことから，奈良県では水田地帯に急速に拡散し，一部では棚田を伝って分水嶺を越えたことが知られる（松本ほか，1998）。同県では水田の畦に穴を開けて壊す害魚とされており（松本ほか，1998），本県でも今後の分布域拡大に注意が必要である。なお，メダカ池では現在，地元有志によってできうるかぎりの駆除が進められている。

謝 辞

本報の執筆にあたり，MST メダカさん家クラブの西本光博氏と武田和志氏，グラウンドワークひだかむらの方々，トンボと自然を考える会の杉村光俊氏，有限会社エコシステムの細木信吾氏，株式会社東洋電化テクノリサーチの朝岡隆氏には，標本の提供や採集への協力をしていただいた。高知大学理工学部海洋生物学研究室の熊木慧弥，松永 翼，橘 皆希，太田 翔の各氏には，標本の登録や観察への協力をしていただいた。これらの方々に厚く御礼申し上げる。

引用文献

安芸昌彦・大高裕幸. 2005. 香川県におけるタウナギの採集記録. 香川生物, 32: 13–20.

藤田朝彦. 2025. タウナギ. 細谷和海（編），山溪ハ
ンディ図鑑 日本の淡水魚 第4版. 山と溪谷社，東
京. 552.

波戸岡清峰. 2018. タウナギ科. 中坊徹次（編），小
学館の図鑑 Z 日本魚類館. 小学館，東京. 181.

細川昭雄. 1987. タウナギ. 徳島淡水魚研究会（編），
徳島県魚貝図鑑 淡水魚編. 徳島新聞社，徳島. 159–
161.

今谷信夫. 2001. タウナギ. 川那部浩哉・水野信彦・
細谷和海（編），山溪カラー名鑑 日本の淡水魚 改
訂版. 山と溪谷社，東京. 676–677.

蒲原稔治. 1943. 土佐の河川の魚類. 高知博物学会（土
佐の博物），10: 8–15.

蒲原稔治. 1962. 高知県の淡水魚類について. 高知大
学学術研究報告, 10（自然科学），1（2）: 7–18.

高知県レッドデータブック[動物編]編集委員会（編）.
2002. 高知県レッドデータブック[動物編]. 高知
県文化環境部環境保全課，高知. 470pp.

高知新聞. 2018. 日高村の池にタウナギ.（平成 30
年 5 月 14 日付け記事）

松本清二・岩田勝哉. 1997. タウナギの雄による卵保
護と仔稚魚の口内保育. 魚類学雑誌, 44(1): 35–41.

Matsumoto S, Kon T, Yamaguchi M, Takeshima H,
Yamazaki Y, Mukai T, Kuriwa K, Kohda M,
Nishida M. 2009. Cryptic diversification of the
swamp eel *Monopterus albus* in East and South-
east Asia, with special reference to the Ryukyuan
populations. Ichthyological Research, 57(1): 71–
77.

松本清二・永井伸夫・今西塩一・蓮池宏一・幸田正典.
1998. 奈良県及びその周辺域での移入魚タウナギ
の分布拡大. 日本生態学会誌, 48(2): 107–116.

宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦. 1976. 原色日本
淡水魚類図鑑 全改訂新版. 保育社，大阪. 462pp.

中坊徹次・甲斐嘉晃. 2013. タウナギ科. 中坊徹次
（編），日本産魚類検索 全種の同定. 第三版. 東
海大学出版会，秦野. 603, 1903.

落合 明・寺岡 澄・半沢直人. 1980. 高知県におけ
る淡水魚の生息と分布の概況. 高知大学学術研究報
告, 28（農学）: 145–156.